

「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」検討・準備グループ(第2回)議事概要

日 時：平成 28 年 7 月 19 日(火) 15：00－17：00

場 所：文部科学省 3F2 特別会議室

出席委員：岡本主査、荒瀬委員、沖委員、川上委員、関根委員、平方委員、
宮本委員、安井委員

【資料説明】英語 4 技能の評価の実施形態について

○橋田室長より資料 1 に基づき「「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の
英語 4 技能評価の実施形態について(たたき台)」について説明

【自由討議】英語 4 技能の評価の実施形態について

宮本委員：確認をしたいのだが、今回ご提案されている 4 技能資格検定試験と
いうのは、既存の資格検定試験ではなく、新たに適合したものを作る
のか。

橋田室長：認定の基準にもよると思うが、資料 1 の 1 枚目の※1 にもある通り、
認定基準によっては、既存の検定試験を若干変える程度の団体もある
と思うし、団体によっては、もし本当に参入するとなると、新たに作
る必要もあるかと思う。資料の 4 ページに団体を参考でつけさせてい
ただいているが、学習指導要領を意識して作っている団体もあれば、
留学向きの団体もある。認定基準によっては、既存の試験を修正する
団体もあれば、新たにそれ用の試験を作る団体もあるかと思う。

川上委員：案 3 は、もし案 1 と案 2 をコンバインドするなら、センターが委託
すると思うが、これをやらないのは、民間となかなか整合性が取りに
くいか、そのような理由か。

橋田室長：1 社への委託になるので、その 1 社がいなくなった場合や、不測の事
態があった場合に対応できなくなる。また、委託のスキームの形だと、
55 万人を一斉に実施する場合、実施場所の確保できるかという観点
で、この案は現実的にはできないのではないか。案 2 の方向性は難し
いのではないかということで整理してある。

川上委員：案 3 の場合は、どのような形で問題を作らないといけないのか。検
定料に開きがある点について、29 年度に公表しないといけないと思
うが、今の民間の中で対応できるのか。

橋田室長：認定基準の具体的な面を、次回までに整理したい。その際、価格設
定も、どれくらいの額を設定するのかということで、かなり民間の対

応が変わってくると思うので、併せて整理したい。

角田課長：補足だが、案3は、案1と案2をコンバインドするという意識で書いているわけではない。基本的には、案1で資格検定試験を活用して色々な試験を受けられるパターンと、一括でどこかでやるために委託するパターンという、2つがベースにある。その中で、案1をやる場合、いきなりは難しいので、過渡的にセンター試験を実施するという。案1と案2をコンバインドではないということだけ、補足させていただく。

荒瀬委員：民間は、学習指導要領に具体的にどれだけ準拠しているのかわからない。資料1の案3のセーフティネットは当面でよいのか。民間のものが怪しいなら、当面も永遠も同じだと思う。永遠にセーフティネットはあった方がいい。民間が複数参入するなら、案3はいつまでがいいと思うか。

橋田室長：仮に、案3でスタートした場合、民間の認定型の仕組みが軌道に乗るかというところだが、1つの見極めとしては、32年度からの現行学習指導要領下における取組と、次のステップとしては、36年度からの新学習指導要領下における取組があるので、その段階観で判断すると思う。つまり、32年度を取組をしつつ、場合によっては、36年度からは完全に民間に任せていくと。確かに、荒瀬先生ご指摘の通り、仮に、軌道に乗っているように見えても、万が一に備えて予備を設けることは議論もあるかと思うので、その点についてもご議論いただきたい。

荒瀬委員：大学では4技能の組み合わせの選択があると思うが、4技能を満たさない組み合わせもあり得るのか。センターがReadingとListeningをやるなら、それでいいと。今のままで変わらない場合もあるのではないかと。それで今回の改革を考えると、どうなのかなと。

橋田室長：個別大学の活用を促すことについては、課題になってくると思う。その点、大学入学者選抜実施要項の中でも、この4技能を後押しする形での対応が必要と思っている。それ以外の誘導策として、財政的支援を含め、検討課題になってくると思う。

沖委員：1点目に、先ほどから出ている、4技能については、私も2年ほど私学の代表として、連絡会議等に出ている。各団体、非常に熱心に検討されている。ある程度時間があれば、相当緻密に対応してもらえらるうということは、共有しておきたい。ただ、常にリスクはあって、海外でも、特定の試験については、不正があり、その試験は使えないということもある。使う場合には、リスクもあるということ承知し

ながら使っていく方がいいと思う。2点目に、点数で出すのかレベルで出すのかという話で、特にCEFRとの関係で、非常に選抜性の高い大学だと、例えばB1以上でといったように、非常に高い水準で出てくるような4技能テストであって、点数が出てくるということになっている。一方で、このテストを私学の受験者も悉皆で受けてもらって、個別選抜への $+ \alpha$ と想定すると、A1・A2を相当分けないと、そもそもレベルの評価もできないリスクがある。レベルとしては4つか5つくらいの非常にざっくりしたものでいいと議論が落ち着けばいいが、相当リスクある話だと思う。点数で出すのか、レベルで出すのか、それもCEFRで出すのか。入学対応という視点で考えるならば、グローバル対応な資格検定試験を使うのか、学習指導要領に準拠した資格検定試験を使うのか。しかし、それを使うと、実は4技能がまだ十分でなかったりする。学習指導要領に準拠することにこだわるのか、もっと大きな、中長期的な規模で考えるかでも、話が違う。それについて、ここでなのか、それとも別の場でなのかはわからないが、詰めて方向性を示した方がいいと思う。最後に、私立大学として、これはすごく使いにくくなるリスクもあると思う。早稲田大学の立場なら歓迎だが、ほかの私学では、グローバル対応のものを使うのか、学習指導要領対応のものを使うのかで各大学で考えが違うので、違う入試制度として話を進めているのだが、ほかの多くの私学は違うと思う。**Reading** と **Listening** のみの選択肢も残しておいた方がいい。高い英語力を求めている私学も現実にはあるので、まさにそこにセーフティネットというか、移行措置みたいなものを張ったうえで、学習指導要領がより改善されて、英語の力が相当上がってきて、内部試験でも外部試験でも大丈夫だとなってから移行してもらわないと、選抜できないのではないかなと思う。これは文科省で検討してほしい。

荒瀬委員：沖先生の話は少し違うと思う。4技能をしっかりやっていくという話なのに、2技能の選択肢を残しておくのに違和感がある。結果的に、高校の授業が「読む」「聞く」だけで終わってしまうのではないか。4技能をしっかりやっていくことを示すためにも、案1からスタートした方がいいのではないか。

岡本主査：案3について、今のセンター試験は、**Reading** と **Listening** をやっている。私のイメージでは、**speaking** と **Listening** を任せて、**Writing** と **Reading** を自分の大学でしっかりやるということもありうると思う。

橋田室長：そこは、個別選抜の改革とセットで考えなければいけない。各大学

のアドミッションポリシーに基づいてやるべきと思うが、今回の改革では、4技能は推進していくというスタンスであるので、何らかの形で担保されるべき。

安井委員：基本的には、4技能をベースに考えていかないと、最初から同じ話になってしまうので、4技能をどう使うかに関しては、各大学によって色々あると思う。4技能をどうやっていくかの方法論の話だと思う。セーフティネットに関しては、文科省の話は、1社しかできない時に、その1社がいなくなった場合の担保はどうするかという話だが、ここでは議論しても難しい話と思う。

岡本主査：確かに、案3からスタートして、案1にいつから切り替えるか、という話は、ここでは議論することが難しいと思う。やっていきながら考えていくしかないと思う。

関根委員：案1がいいと思う。セーフティネットもわかるが、あまり複雑だと混乱して分からなくなるので、シンプルイズベストでやるべきだと思う。

岡本主査：確認だが、来年からとかではなく、ある時点からそうするよ、ということが良いか。

関根委員：案1でやるので、スペックをきちんとしたうえで民間に任せますよというアナウンスをした方がいい。いつからか、というと、できるタイミングしかないと思う。

義本審議官：基本理念は案1か案2と思う。實際上、50万人以上が受験し、離島や僻地も抱えていて、色んなリスクの問題もある。固定化してしまわないように、どういう条件がそろえば案1になるかなどを決めた方がいいと思った。

岡本主査：基本的には、方向としては案3で、今の意見を踏まえたうえでもう少し検討をお願いしたい。

平方委員：前回の議論だと、案1は基本的に無い、ということだったと思うが。

橋田室長：前回は、センター単独実施型・委託型・認定型の3つを示した。あの時の議論としては、民間の資格検定試験を活用しつつ、質をコントロールするというスキームで案1を用意した。

【資料説明】記述式の作問・採点方法について

○橋田室長より資料2に基づき「思考のプロセス等と解答形式の関係」について説明

○橋田室長より資料3に基づき「数学における思考のプロセス等と解答形式と

の関係」について説明

○橋田室長より資料 4 に基づき「記述式に関する検討範囲について（たたき台）」について説明

【自由討議】記述式の作問・採点方法について

岡本主査：数学と国語が一緒に語られているが、数学と国語はずいぶん違う気がする。どういう試験するかでだいぶ違ってくると思う。数学だと、数式だけ書かせても、考えなしにはそこにたどり着かないので、部分的に答えを見ても思考の過程が見て取れるのかと思う。国語のほうは、考え方を表さないといけない。実際、高校の試験は、学期試験とかどういう試験でやっているのか。

関根委員：学校にもよるが、高校での数学は途中計算を全部答案に書かせて、途中のところで部分点をあげたりしている。それを全部採点しているので、思考力・判断力・表現力を見て採点している。

宮本委員：関根先生が言うとおりの、簡単な計算問題もあるが、証明を全部書かせたり、途中式を求めるケースが圧倒的に多いし、普段の授業の中でも、考えのプロセスを求める授業が多くなってきている。国語も同じようなもので、漢字の書き取りとかはあるが、なぜ私はこの考えに至ったのか、という過程を重視するので、採点が大変。考えに考えて、ある一定の答えが出るようにすれば採点は簡単だが、それは当たり外れみたいなものになる。個々の生徒がどういう風に考えているかが分かるように見ようとすると採点が非常に大変。

岡本主査：問題の難易度は別として、特別なことを問うているわけではないということか。

宮本委員：そうです。

岡本主査：資料に書かれていることはよくわかるが、どういう問題を作るかというのは本質的なことだ。マークシートだが、センター試験は非常にいい問題が出ている。経験の蓄積がある。記述式といったときに、そっちに引っ張られるのではないか。

橋田室長：今回は作業状況の報告というもので、作問の考え方の整理と、どういう問題形式が考えられるかということ整理している。問題イメージ例そのものについても、今年度もフィージビリティ検証事業で、センターの方で問題作成の体制を別途整えて、モニター調査を進めていく。その点も、キャッチボールをしつつ、また報告したい。

川上委員：出題範囲は、今のセンターと同じか。それとももう少し広げるのか。

橋田室長：出題範囲は、基本的には今のセンターと同じだが、検討が必要なの

は、記述式でどうするかということと、科目の簡素化について、センターの科目数が肥大化しているのので、精選の方向を探っていきたいと思う。

平方委員：32年度と36年度では、明らかに出題のレベル、学習の分類を変えるということか。レベル6まで新学習指導要領に入れるのか。アクティブラーニングとっているわけだから、レベル4までだと、アクティブラーニングにはならないと思う。その辺は意識しているのか。

橋田室長：指導方法は、教育課程企画特別部会で議論している。我々のほうでも、議論を横目で見つつ、整理しようとしている。教育課程課ともよく相談して、資料2の別紙、2-4のような資質能力を踏まえた形で、32年度から思考のプロセスといった考え方を反映したい。そのうえで、36年度は32年度のをより充実させていきたい。

平方委員：32年と36年は線を引くということか。

橋田室長：線の定義にもよるが、32年度からは資質能力の議論を踏まえた形での作問を考えている。そして36年度はそれを充実させていく。36年は32年の延長線上にある話で、きちんと線で別れるというよりは、発展させていく形で問題作成をしていきたいと思う。

【資料説明】実施方法・時期について

○橋田室長より資料5に基づき「「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の記述式の実施方法・時期のイメージ（たたき台）」について説明

【自由討議】実施方法・時期について

宮本委員：マークの日程だが、案の2の、マークも含めた前倒しの発想は全くなかった。現行のセンター試験の日程は、当時の記録を読んでもらえればわかると思うが、大学入試のことと、高等学校教育への影響とのギリギリの日程であそこに置いた。そういうことを考えたときに、マーク自体を1か月も早めるということは、到底考えられないと思う。つまり、高等学校教育はそもそもなんなのかという、根幹に関わることだと思う。高校3年生になって初めて学習する科目で、マークの試験を受験する生徒もいる。学習指導要領では、これだけの内容を、これだけの時間をかけてやりなさいと言っているわけだが、その通りにやっていたら間に合わないというのを文科省自身が作るというのは全く理解できない。少なくともマークをセットで12月に持ってくるのは、文科省が自分で自分の首を絞めていることにならないのかと思

う。学習指導要領とはそもそもなんなのか。今日も午前中に教育課程部会で議論してきているが、物理の単位というのは、これだけの内容を週に4時間、35週教えましょうと言っているわけだが、それでは試験に絶対間に合わないという時期に試験を持ってくること自体おかしいのではないか。そういう意味で、マークを12月に持ってくるというのは、あってはならないと思う。

関根委員：基本は同じだが、もともと、評価テストにしても、高大接続にしても、高校の授業を変えようということがある意味メインだった。そういった意味で、高校の授業を台無しにしたらまったく意味がない。そういった意味では、最低マークは1月の日程で。記述だって、私が現場でやっていて、ギリギリいっぱいだとすると、12月下旬がギリギリいっぱいかなと。つまり、正直申し上げて、現行でも授業が追い付いてない。私が見てきた学校では、授業時間が足りなくて、放課後に授業している。それぐらい、今だって無理な状況。それをやっているのに、前に持ってくるというのは、学校では授業するなどと言っているのと同じ。できないというのが現実に見えているので、そういった意味では、前に持ってくるってというのは、絶対無理だと思っている。対案としては、高校の学びを変えましょうということで、採点者800人というのは業者に任せるという話だが、私は高校の教員を使うべきだと思う。高校の教員に、皆で協力しないとやっていけないと。大量に人数を動員して採点するというのをしないと間に合わないの、そういう発想でやっていかないと、とても私はできないと思う。

平方委員：時期については、柔軟に考えることはできないと思う。もちろん、高校教育の影響は、一番自然な形が望ましいわけだが。今回のシステム改革会議の議論は、生徒にどのような力をつけるのかということを考えて、高校教育を改革していこうというもの。それは、大学に入ってから必要な力だし、社会に出てからも必要な力である。試験をいつにするかと、高校教育への影響として、試験の範囲がどうなるのかということ、問題との関わりが出てくると思う。試験日程を早くすると授業が間に合わないというのは指導の話。それと、どのような力をつけるかということについて、高校の先生と話すことはできないのかと思う。例えば、いくつかの教科科目は、進路の関係でとかなると思うが、国語とか数学で、どのような範囲の問題を出すかによっても、時期との関係は考えることはできないとはならないと思う。役に立つことなので、この時期にやりますよというのは通じないので、高校が理解できないことをやることは不可能だと思う。資料の出方が、

記述式の問題を出すためには、この時期でなくてはならないとなっている。こういった力をつけよう、そしてその力を測るためには、この時期だという見方をすれば、また話は違うのかと思う。

荒瀬委員：現行の考え通りに、授業をやり、試験をすると、1月という考えになると思う。発想の転換をして、高校教育の質と、大学教育の質、そしてそこを接続する選抜試験ということなので、一体的に考えたときには、柔軟に議論しないと変わらないと思う。

岡本主査：大学側も非常に多様な入試をやっていて、受ける方は1回だが、やる方は何回もやっている。そこをどう変えるかとなると、パンドラの箱を開けるような話だ。国公立の合格発表以降も補欠合格とかが、28日くらいからある。今度は4月1日から授業が始まるので、非常にタイトなスケジュールだ。機械的にここに移せばいいという議論だと納得されないと思う。かといって、時間かけてやるにしても、誰がやるのかという話になる。この場で結論を出さなければならないと思う。

沖委員：私大全体の状況を踏まえて申し上げる。私立大学は、2月1日～中旬まで試験をやっている。現行の学力重視でやっているのだから、何とかこの日程でやっていけていたが、このままの日程で行くと、この試験を使える私大は増えないと思う。改革は、この共通テスト+個別入試の改革となっていたと思うが、日程は同じで非常にタイトだけれども、個別入試を特別丁寧にやるとなると、受験生側は、1大学か2大学位しか受けられないという、とんでもない条件を付けない限りは物理的に無理である。とすると、あまり大きく変えられないだろう。では、前に倒すのか、あるいはこの日程でやるならば、個別入試の選抜を共通テストの相当前に始めて、最後に学力担保として共通テストを使うとか。現実問題として、今の国立大学のスケジュールには、乗るかもしれないが、私立だと、それほど大きな改革は求められているとは思っているが、現実にはできないというジレンマもある。私学も必須とか、大学入学希望者は絶対に受けないといけないとかにするのであれば、相当厳しい。一方で、この日程だと、従来の試験からあまり変わらないと思う。

川上委員：二次試験でも、従来の個別ではなく、面接と小論文とか、新しい入試方式を入れるということで、相当時間が必要となり、大学が今まで以上に時間と人をかけるとなると、現実的に厳しい。マークより前にやることも視野に入れるべき。公立大は中期日程もあるので、かなり時間が限定されているので、どこにシフトするかによって、受験に対する影響がある。それと、手間暇かけて入試をやるとなると、規模が

小さいので、対応できるか心配。資料 5 の最後のページ、「④採点の組織化」について、採点の監督者は大学教員がやるとのことだが、今回のケースだと、数学と国語の教員が対応することになると思うが、どこの大学も、数学と国語の教員はこの時期非常に大変で、出題をしている、あるいは採点をしているので、ほぼ全員が関わる。公立大学の場合は、人的に余裕がないので、もし人を出せとなると、大学としても非常に厳しい。

安井委員：入試も多様化している。ここで言っているのは、一般入試のことだと思う。この共通テストの結果をいつ使うかという話だ。順番にやっていって、最後にテストの結果を使うのであれば、ちょっと下がってもいいと思う。両方で引っ張り合いしててもあまり変わらないので、私立大学の場合は、例えば、芸術系の入試だと、実技を見てから最後に学力担保として使うのであれば、もう少し遅くできると思う。そうでなければ、大学によっては規模別、あるいは専攻別などによって変わる可能性がある。もう少し細かく見ておかないと、ここで線を引いたとしてもちょっとおかしい感じがするので、情報提供をもっとしてもらって整理してもらいたい。高校教育としては、宮本先生が言っていたことが原理原則だが、大学はそこまで見ていない。ここは少し、お互いに流動的にできるのではないか。

岡本主査：AOや推薦では、最後に学力担保として使えるかもしれない。東大などの推薦でもセンター試験を課している。一方で、私学は1つの大学でも多様な入試をやっていて、全員がセンター試験を受けるわけではないので、すべてがこれを使ってやるわけではないと思う。記述式だけ前倒しはどうだろうか。大学から、だれが監督するのかとかの文句が出ると思うが。

宮本委員：システム改革会議の議論では、記述については国語と数学。国語については、必履修で学んだ内容についてはマークという話だった。試験日がどこになるだろうが、そこまで学んだ内容を問うのだと思っていた。ところが、マークと一緒にされると、その論理からずれてくるようになると思う。マークは動かさず、記述式だけ動かすと思っていた。そうでなければ、限定をかける必要はないわけなのだから。どういう力を問うかが明確になればいい。高校で学んだことをすべてセンターでは問われているので、それと同じことをされると、日程がどんどん前に行くのと不利になるのは明らかだと思う。

荒瀬委員：どういう問題で、何を問うかが重要。国語と数学の話にもあったが、

答えを比較して選ぶのであれば、センター試験の中には、問題文を見なくても、選択肢を見て比較して解答すれば、そんなに外れないということが、なきにしもあらず。そういうことではなく、自分で言葉を出させるかを見るのであれば、この時期でなくてはならないとはならないと思う。基礎学力テストとの関係もあるが。その辺が見えないと。やはり中身が分からないと。

岡本主査：私が考えが違うのは、必修履修科目でも、選抜試験なのでいろいろ考え方があってと思う。マークシートの試験の時に記述式をやることも考え方としてはあると思う。必修履修だからといって、1年生の時にすべて分かってないといけないかということ、例えば数学なんかは、数学Ⅰをやり、数学Ⅱをやり、数学Ⅲをやった時に、初めて、数学Ⅰではこういうことをやっていたのかということを理解したら、それは立派なことだ。ただ、私がさっきから気になっていたことは、日程をずらすと、いろんなところに影響があるから悩ましい。

橋田室長：作問の検討状況は先ほどご説明したとおりだが、記述式がどういう力を問うのか、どういう作問の考え方で、どういう問題の想定をしているのかということは、次回までに整理を進めてわかりやすい形で示したい。

関根委員：記述式の場合、出題範囲を明確にしないと。マークは全範囲になると思う。そうすると、記述式はここまでの範囲、という風にできると思うので、範囲は終わっているということができると思う。ただ、そうすると2回試験を行うことになるので、会場の問題が出てくる。

荒瀬委員：進学希望が多い高校で、センター試験までにすべて履修するという考えが、以前話題になった未履修の問題を生んだのだと思う。1月の中旬だって、すべてが終わっていることにはならない。私が見てきた学校は、2月まで授業をやっていた。今までの出題の仕方がよかったという考えから始めると、何も変わらないと思う。出題範囲の明確化が重要。高校教育への影響というのは、少なくとも、この試験の範囲を出すということを決め、その時期によって試験の出題範囲が変わらなければと思う。そうしなければ、高校教育も変わらないと思う。

関根委員：ここで議論すべきことではないと思うが、大学全てを9月入学にすべきと思う。高校教育が終わらないうちに試験をすることがそもそもの矛盾。3月まで授業をして、9月入学にすべき。マークは高校がすべての範囲をやってから試験すべきもので、記述式は「ここまでの範囲で」とすればいいと思う。

【資料説明】 その他

- 橋田室長より資料 6－1 に基づき「「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」
フィージビリティ検証事業」について説明
- 橋田室長より資料 6－2 に基づき「「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」
プレテスト実施事業（案）」について説明
- 橋田室長より資料 7 に基づき「「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の
成績表示に関する主な論点について（案）」について説明

【質問等】

岡本主査：工数の 4 人について、何とかならないかなと思う。数学 I と数学 I
A についても、数学 I は必履修だからおいているわけだが、数学だっ
たら範囲が短い方が試験は難しくなる。この精査は本気になってやら
ないといけないと思う。

【資料説明】 今後の予定等

- 橋田室長より資料 8 に基づき「当面の主な日程（案）」について説明

以上